

『わたしの時を見つめて』ヨハネ7:1-10

7:1 そののち、イエスはガリラヤを巡回しておられた。ユダヤ人たちが自分を殺そうとしていたので、ユダヤを巡回しようとはされなかった。

7:2 時に、ユダヤ人の仮庵の祭が近づいていた。

7:3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った、「あなたがしておられるわざを弟子たちにも見せるために、ここを去りユダヤに行つてはいかがです。

7:4 自分を公けにあらわそうと思っている人で、隠れて仕事をするものはありません。あなたがこれらのことをするからには、自分をはっきりと世にあらわしなさい」。

7:5 こう言ったのは、兄弟たちもイエスを信じていなかったからである。

7:6 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。

7:7 世はあなたがたを憎み得ないが、わたしを憎んでいる。わたしが世のおこないの悪いことを、あかししているからである。

7:8 あなたがたこそ祭に行きなさい。わたしはこの祭には行かない。わたしの時はまだ満ちていないから」。

7:9 彼らにこう言って、イエスはガリラヤにとどまっておられた。

7:10 しかし、兄弟たちが祭に行ったあとで、イエスも人目にたたぬように、ひそかに行かれた。

●序論

今日、イエスさまに「上京を勧める」兄弟たち言葉がありました。

7:3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った、「あなたがしておられるわざを弟子たちにも見せるために、ここを去りユダヤに行つてはいかがです。

いわゆる祭りの日に人がそこにたくさん集まるから、これはチャンス、エルサレムに打って出てあなたのそのわざをを披露すべきだという勧めです。

今日、このところを見ていく中で心に留まるイエスさまの言葉があります。

7:6 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。

この言葉を心にとめつつ、聞いてまいりましょう。

●序論

I. 兄弟たちが気にすること

先日見てきた6章では、イエスさまの言葉を聞いて多くの弟子たちが離れ去ったということを見ました。その霊的な言葉を聴き取り、受け入れ信じることができなかったということをつまずいたのだとお話したのです。

そのときに「はたして、わたしは教えられやすい人であろうか」と問いかけも。それから7カ月くらいたったころ、イエスさまは、ご自分の生まれ故郷に近いガリラヤ地方を巡回されていました。

イエスさまの兄弟たちもその働きを見ていたことでしょう。

でもイエスさまの言葉と働きに、どこまで心が開かれていたかは、?マークです。

7:2 時に、ユダヤ人の仮庵の祭が近づいていた。

7:3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った、「あなたがしておられるわざを弟子たちにも見せるために、ここを去りユダヤに行ってはいかがです。

7:4 自分を公けにあらわそうと思っている人で、隠れて仕事をするものはありません。あなたがこれらのことをするからには、自分をはっきりと世にあらわしなさい」。

こんなところでくすぶっていないで、あの都で、そこに集まる人々に向けて、自分の力を見せつけてやりなさい。人々はあなたを評価してくれるだろう…とここで気になる言葉が後に続きます。

7:5 こう言ったのは、兄弟たちもイエスを信じていなかったからである。

「兄弟たちも」とあります。つまりかつてイエスさまを離れ去った弟子たちと同様であったということです。自分たちの考えるメシア像、自分たちの理想とする支配者をイエスさまに求めていたということです。

さてこのありさまを見て、わたしたちの心が問われます。

だれでもない、わたしのためにそのように歩まれていたイエスさまの思いに気づいていなかった弟子たちと並ぶのではないのでしょうか？

Ⅱ. イエスさまが見つめているもの

7:6 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。

イエスさまは「わたしの時」に目を向けておられました。その時はまだ来ていないと。

兄弟たちが思った、イエスさまの時というのは、力による支配と権威を大きく人々に示すそんな時だったのでしょ

しかし、イエスさまが語る「わたしの時」というのは、それとはまったく別ものでした。父なる神さまの御心のもとに徹底して自分を置き、それゆえ徹底してへりくだり、そして、その御心のゆえに、人々の手に引き渡されて殺されるという、あの十字架の受難の時を見ていたのです。

ピリピ2:8「(イエス・キリストは)おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで(父なる神の御心に)従順であられた。」。

「その時はまだ来ていない」。それがイエスさまの語るところでした。

「今ならば…」 「今が絶好の機会」という、兄弟たちや人の考えは、ある意味、理に適っているかのように見える。

けれども、イエスさまは神の定めた「わたしの時」ご自分の時を見つめて、それを人や勝手な判断の手に渡さなかったのです。

父なる神さまの御心にすべてをゆだねて。その時を待つこと。従うこと…。それがイエスさまのお姿でした。

神さま無しの一步と、神さまありの一步では、天地のさほどの違いがあります。

イエスさまは「わたしの時」を見つめ、道をたどられる。兄弟たちはそばにいてもその

真意を受け入れきれないでいたのだとわかるのです。

7:8 あなたがたこそ祭に行きなさい。わたしはこの祭には行かない。わたしの時はまだ満ちていないから」。

そうして

7:9 彼らにこう言って、イエスはガリラヤにとどまっておられた。

この言葉ではっきり区切りながら、そのすぐあとに実際には、その後ひそかにエルサレムに入られるイエスさまを描き出します。

それは、イエスさま兄弟たちや人が求めるような名声を求めるためではないということだったことが、わかるのです。

Ⅲ. わたしたちの時について

7:6 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。

ここにはイエスさまの時と、兄弟たちの時との違いというものに触れられています。兄弟たちには言われます。

7:6 そこでイエスは彼らに言われた、「わたしの時はまだきていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。

兄弟たちに告げた「あなたがたの時」には、2つの意味があります。

ひとつは、リビングバイブルではかみ砕いてこう訳していました。

…しかし、あなたたちはいつ行ってもいいのです。世間の人に憎まれるはずありませんから。しかし、わたしは憎まれています。彼らの痛いところを突くからです。あなたたちだけで行きなさい。

この世の価値観や考え方に馴染み過ぎている兄弟たちのありさまは、この世の敵意の対象にはならないのです。

もう一つ「あなたがたの時はいつも備わっている」という言葉に、わたしたちは神さまに立ち帰ることのできる時が、いつでも備えられていると語られていることがわかります。

つまり、神様の御心に従おうとする今、恵みの時が備えられているのです。

2コリント6:2 神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。

十字架の受難を「わたしの時」として見つめておられたイエスさまにとって、兄弟たちの言葉は、なんと能天気なもの映ったことでしょうか。

それでもイエスさまは、それを裁くのではなく慈しみます。

「あなたがたの時はいつも備わっている」と。

わたしたちが「恵みの時」を生きているゆえんは、それです。

わたしたちに与えられた「時」というもので、忘れてはならないこと。それはわたしの人生「神さまがなさる時」がある時、それを信仰によって応えることの大切です。

一步踏み出した先は、神さまにゆだねる必要があります。

伝道者の書3:11

神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見きわめることはできない。

●最後に

当時も、そして今も、わたしたちの生きる時代には、争いのにおいがあり、悩みがあり、貧しさがあり、悲しみがあり、敵意があります。

その争いの悲惨さを目に染み耳にするわたしたちは神さまに訴えます。

わたしたちは、神さまがその時をご自身の権威をもって定めてられるからこそ、安心して祈ることができます。

一方で、イエスさまが「わたしの時」とされたのは、あのすべての人のために負われた十字架の苦しみの時であったことを忘れてはなりません。

それは争いを争いによって、力を力によって治めるためではなく、徹底して自分にその苦しみを負い、ご自分のすべてを捨てて十字架で命を捨てて、そうして父なる神にとりなしておられた姿であったということです。

「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。 (ルカ23:34)

この十字架を受ける時を、イエスさまは「わたしの時」と語り、また同じヨハネの福音書では、「人の子が栄光を受ける時がきた。(12:23)」と語るのです。

わたしたちは今この方を救い主として受け、そしてこの恵みの時に生かさせていただいています。この時代に、わたしたちが救われていることには神さまのご計画があることをわたしたちは覚えましょう。そしてイエスさまの御足のあとを祈りつつたどる、そういうものでありたいと願います。